

『愛に溺れて恋に焦がれる』

著：仙道はるか

ill：有馬かつみ

(かなり酔っていたように見えたが……)

課長を無情にも置き去りにした後、大崎は大通りだけではなく、店と店の間の路地も覗きながら和泉の姿を捜し求めた。

その姿が、あまりにも鬼気迫っていたせいか、今度は道端にたむろする男たちも大崎に声をかけてこようとはしなかった。

それについては幸いだったが、肝心の和泉の姿がなかなか見つけれないことに、大崎は彼には珍しい激しい苛立ちと焦りを感じる。

(いったい、どこに消えたんだ?)

どこか店の中に入られていたらアウトだなとも思ったが、あの足元が覚束ない様子を考えると、その線は薄い気がした。

けれど、和泉の後を追っていった、連れらしき中年の男の存在が気になる。

(あの男と、どこかに……。そうだ、もしラブホテルにでも連れ込まれていたりしたら、どうしたらいいんだろうか……)

想像するだけで不快な気持ちになったが、今はどうしようもなかった。

そうして、十五分ほどあちこちの路地を捜し続けた結果、ようやく何度目かに覗き込んだ路地の片隅で、大崎はそれらしい人の姿を見つけることができたのだった。

「……和泉先生？」

背中を丸めるようにして地面にしゃがみ込んでいるのは、この位置から顔は見えないものの、身体つきからして目当ての相手と見てまず間違いなからうと、大崎は慌ててその青年の傍へと駆け寄った。

大崎の呼びかけに返事はなかったが、俯いた顔を至近距離から覗き込むようにして確認したところ、捜していた相手だと分かり、内心でホッと安堵する。

「大丈夫ですか？」

大崎は、和泉の傍らへと片膝をついた。

スーツが汚れるとは思ったが、今はそんなことを気にしている場合ではなかった。

体調が悪いのか、和泉の身体は先ほどからずっと小刻みに震えていて、それが大崎には心配だったからである。

「どうしたんですか？ どこか具合でも悪いのですか？」

相手になるべく警戒心を抱かせないようにと、極力優しい声でそう訊ねて、小刻みに震えている年上の青年の背中にソツと掌で触れる。

しかし、そんなに強く触れたわけでもないのに、和泉は大仰なほどに敏感に反応すると、大崎の手を覚束ない様子で振り払おうとした。

「やっ……触るな……！」

反射的に顔を上げた青年の、熱っぽく潤んだ瞳と赤く色づいた唇、そしてほんのりと淡いピンク色に火照った頬に、大崎は目を奪われる。

しかし、相手の容姿に目を奪われたのは、何も大崎だけではなかったらしく、和泉の

ほうも大崎の顔を見て綺麗な目を大きく睜っていた。

「なっ、おまえ……大崎？ そんな、なんで……？」

どうやら、和泉も少しは正気を取り戻したようだった。

それまでは大崎に声をかけられていることにも、気づいていなかったらしい。

とりあえず、自分のことが誰かは分かっているようだと思って、大崎はホッとした。

先刻の和泉の冷たい態度にショックを受けたばかりだったので、彼の口から自分の名前が発せられたことが、今の大崎にはただ単純に嬉しかった。

「なんでって、あなたが心配だったからに決まってるじゃないですか。具合が悪いようなら、どこかで休みましょうか？」

見つめ合いながらも、和泉に優しい笑顔を向けて訊ねると、ようやくいらいら落ち着きを取り戻したらしい高校時代の恩師は、慌てたように細い首を左右に振った。

「いい、酔っただけ……だから……」

酔いのせいなのか、いつになく舌足らずな声音が、大崎の知る教師のそれとは思えないほどに稚い。

「それなら、やはり吐いてしまったほうがいいですよ。そのほうが、きっと随分と楽になると思います」

大崎としては、あくまでも親切心のつもりだった。

この段階では、まだ和泉へ対して疚しい気持ちがなかったことを、どこぞにいるかもしれない神に誓ってもかまわない。

(急性アルコール中毒の可能性もあるし、病院へ連れていったほうがいいだろうか……)

本当は、もっといろいろと和泉には訊ねたいこともあったのだが、こうして蒼白な顔で辛そうに震えている姿を見せられては、私情など後回しにするしかなかった。

「やだ……吐きたくない……」

怯えさせないようにと、一度は振り払われた手で、ソツと骨張って硬い肩を包むと、掌の下で和泉の身体がビクンと敏感に跳ねたのが分かった。

この和泉の反応に、大崎はここへ来てようやく違和感を覚えた。

(これは、もしかすると酒だけが理由じゃないな……)

酔っているだけにしては和泉の反応は過剰すぎるし、体温も異常に高くて息も荒い。

さては誰かに薬でも盛られたのかと、大崎はようやくその可能性に気がついた。

(ちっ、マジかよ？ いったい、どこのどいつの仕業だ……？ さっき店の前で揉めてた男の仕業か？ いや、でもまあ……)

これで、堂々と親切な顔をして、和泉の世話を焼く口実は出来たわけだと、大崎はいささか姑息なことを考える。

先ほどまでの殊勝な気持ちもどこへやら、今は明らかな下心を持って、大崎はかつての恩師に対峙していた。

大崎は、どちらかといえば性的には淡泊な性質のはずなのだが、相手がこの世で唯一、自分のほうから想いを寄せた和泉となれば、話は別だった。

「……仕方がありませんね。とりあえず、どこか近場のホテルにでも入りましょう。あなただって、そのような状態では、いっそのほうがいいのではないですか？」

親切めかした口調を装いながらも、大崎の心の中には、着々と邪まな下心が育ちつつあった。

「わ、分かったよ……」

そして、顔くのもようやくといった和泉の様子に、大崎はほとんど無意識に密やかに微笑んだのだった。

(先生には悪いが、僕はこの絶好の機会を逃すつもりはない……)

思いがけない形で和泉と再会をした時は、嬉しさよりも、まず驚きのほうが勝っていたが、今はもう違う。

今の和崎の頭の中を占めているのは、最早純粋な歓喜だけだった。

本文 p30～36 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>